

初めはいつも独りだった

リスク研究

中西 準子

③

(産業総合研究所
安生科学研究部門長)

人生の みちしるべ



個人下水道(家庭用合併処理浄化槽)の見学会。前列左から二人目で説明をしているのが中西さん。86年4月、千葉県流山市にて(写真は中西さん提供)

宇井純さんも同時期「万年助手」と呼ばれましたが、職場での交流は多かったのでしょうか

よく、学生のやる気が低いだの出来が悪いだの文句を言う先生がいますよね。私はそう思ったことがないんです。能力が高い、まっすぐな学生しか私の研究室には来ませんでした。私の研究室は資金がなく調査も自腹なのに、付いてきてくれる学生ばかり。実は宇井さんのおかげです。「都市工の宇井純」は当時から有名で、志の高い学生が都市工に集まってきました。その中から、私の所に来てくれる学生がいたので。

公害反対運動より純粋な調査

研究に興味を持った学生は、私の所に来てくれていました。宇井さんは水俣病をはじめ闘争のイメージもあり、政治的発言も積極的でしたから。当時はノンポリ、非政治的な学生も成田に行って空港反対闘争に参加していたのですが、私はせいせい署名に応じるくらい。共産党幹部だった父の周りで裏切りや転向を見て運動を続ける難しさを感じていましたし、何かのグループに入るとかえって研究が理解されないのではと、過剰なほど政治に警戒的でした。だから宇井さんと現場を共有したことはないので。公害の裁判で証人を頼まれたり、講演を急ぎよ代わったりしたくらいですね。

政治から距離を置くことは大変だったのでは。浮間処理場を調べた70年前後は、自民党から共産党まで、下水処理は企業より自治体がすべてという考え。共産党の「アカハタ」からも散々批判されました。中西は実は過激派なのではないかと、おそろく公安警察関係の人が調べに来たこともあります。

70年から調査を始めた浮間処理場は、73年には廃止され下水道法も改正されました。次に取り組んだ大規模流域下水道の問題では、人口密度が低ければ下水管をよを建設するより、家庭ごとに浄化装置を設けた方が経済的だと示しました。その時「個人下水道」と名付けましたが、どかが「道」だ、そもそも違法だと、建設省には相手にされませんでした。たしかに世界中どこにもそんな装置はありませんでしたが、技術的に十分可能で、自分で設計しました(写真)。3年後には装置が認可され、数年して補助金も下りるようになったのです。

私の所に来た学生さえ、最初は大規模下水道の方がよいという論文を書くんですよ。勉強すると、大規模がよいと書いてある本が大多数ですから。ところが、都市工進学直後の説明会で「それって当然ですよ。先生独自の考えなんです」とも、事実を示し続ければ世間が変わるんだと実感できました。(聞き手・菱山哲平)